

大相撲夏場所が始まり、相撲ファンは楽しみも多いことだろう。さて、北海道と言うと横綱を多数輩出した地域とのイメージが極めて強いが、どうなのかと思って調べてみた。初代明石志賀之助から67代武蔵丸光洋までの間に、8人の横綱が北海道出身である。矢張り多いというべきだろう。都道府県別には、2位の青森の6名を2名上回っている。面白いことに、何故かは知らないけれども、戦前には一名も居ない。8名の横綱のうち第52代北の富士勝昭は、網走郡美幌町の出身、第61代北勝海信芳は、広尾郡広尾町の出身、第62代大乃国康は、河西郡芽室町の出身と、3名の横綱が管内から輩出している。

さて、北海道のロマンを語るときに忘れてならぬのが、義経伝説である。平家追討に功のあった天才武将源九郎判官義経が、兄頼朝に追われ、奥州平泉に難を逃れたが、文治5年（1189）閏4月30日藤原泰衡の急襲を受けて武蔵坊弁慶共々討ち死にした（吾妻鏡）。義経北行説というのは、この時死んだのではなく、蝦夷に逃れ、神か大王になったと言う伝説であり、時代が降るに従って、果てはジンギスカンになったとの説まで出てきたから面白い。例えば、「本朝通鑑」には、「衣川の役、義経死せず。逃れて蝦夷に至り、其の遺種を存す」とあり、日本外史にも同様記述がある。今も変わらぬ、英雄は不滅とする英雄譚であり、悲劇・不遇の英雄を永遠に活かしておきたいという庶民の夢が作り上げた伝説だ。源為朝、西郷隆盛、豊臣秀頼なども同じだが、源義経は判官鬮貞との語源にもなるなど、英雄不死伝説の代表格である。

私は函館で1年半、倶知安で3年勤務したが、この地域特に西海岸ルートは、義経伝説の宝庫でもある。江差には馬岩があり、「雷電」の地名の起こりは、恋多き英雄が「来年帰る」の来年が雷電になったと伝えられ、弁慶の刀掛岩・泊の兜岩・積丹のシララ姫伝説、等々、立派な弁慶像までもあるから不思議だ。そして伝説を事実として信じたくなるから不思議だ。

さて、道東の地域は義経伝説と全く無縁かと思いきや、意外や意外幾つかの義経伝説がありました。道東へのルートは確としてはいないが、平取に義経公園があり、義経神社があって江戸時代に作製された御神体が祀られていることから察するに、日勝峠を越えてきたのであろうか。青森から北海道の白神（福島町）に渡った義経一行は、西海岸を北上して、羊蹄山麓を廻り平取に入ったと伝えられている。平取では「ハンガンカムイ」と尊称されたという。「ハンガン」即ち「判官」であろう。「カムイ」は言うまでもなく、「神」である。

① 弁慶洞、義経山、（本別町）

義経主従13名は、十勝の海岸に辿り着き、タビコライの酋長に案内されてポンペコタンの大酋長と会見した。その時は偶々、春の満月に行う婚約発表の儀式の夕暮れで、いつしか義経歓迎の宴と変わった。以来、暫く、コタンに逗留、建築、器具の製造、狩猟・農耕などの技術を伝授し、良き相談役となった義経は、アイヌからサマイクルカム（文化神）と讃えられた。酋長と登った義経山や一行が暮らした弁慶洞（洞窟）、酋長の娘との悲恋物語が今に伝わっている。

② 義経が尻餅をついた「尻餅沢」（羅臼町）

知床半島まで、来た義経主従は、寄ってきた鯨を一刀のもとに切って、その肉を焼いて食しようとした。焼けたと思われた頃、ヨモギの串が折れて火の中に鯨肉が落ちたので、義経吃

驚して思わず尻餅を付いて、そこに窪地が出来た。

尚、義経尻餅岩もあり、伝承の内容は尻餅沢と同じである。

③ 松浦武四郎の記録に見る義経伝説

- 「むかし判官様、ここの土をとって、キナチャウシの下のチウラホイといえる所へ、城を築きたまいしとか・・・」（北見市街地と川東に挟まれたあたりの土をとって、今の端野町の忠志あたりまで運んで城を築いた。）
- オシヨロマウ：（尻餅沢の話が記述されている）
- イコイベウシ：弁慶が何時も魚を焼いた
- オヘケブ：義経が船を洗う道具を落とした
- マクオイ：義経が幕を張った
- チプウェンテウシ：義経が舟で川上りをし、ここで大岩に舟をぶつけて壊してしまった
- ウカルシヘタヌ：義経がここでウカリと言うアイヌと背中をたたき合う遊びをした。
- シュウベツ：義経がご飯を炊いた鍋をここに置いた
- チトカニウシ：義経が、弓を射て腕力を試した

（参考：<http://www.okhotsk.or.jp/bunka/mukashi/yositune.htm>）

④ 義経岩（屈斜路湖、和琴半島）

義経が釣りをしたときに腰掛けたと言われる岩が和琴半島にある。義経は屈斜路湖で何を釣ったのだろうか。クッシーでも居たのかと思いたくなる。義経岩の裏手には、義経岩の湯とも言える岩で囲っただけの露天風呂があるので、伝説に思いを馳せつつ入浴するのは如何だろうか。

⑤ 材木岩（羅臼町）

武蔵坊弁慶は、国後と知床の余りもの近さに突拍子もない計画を思いついた。それは、この海峡に橋を架けようというものだった。この破天荒な計画にアイヌたちも最初は吃驚したが、同意し、一生懸命に働いた。アイヌとの共同作業は順調に進捗した。村長の娘が弁慶に恋心を抱き、身を持していた弁慶も何時しか彼女の恋心に絆されて、愛し合うようになった。然しながら、有ってはならぬ異民族との交わりに、アイヌの最高神カムイが激怒し、橋造りのため集められた膨大な木材を岩と変えてしまったという。それが今でも材木岩となって残っている。尚、材木岩は、宮城県白石市にもある。

⑤ 帆掛岩（釧路町尻羽岬）

尻羽岬は、湾を抱いている岬とも言われているが、この帆掛岩には、日高から船で逃げてきた義経主従が、ここの沖合で、猛吹雪に遭い、座礁し、義経は崖を上り石像となり船は岩となったという。尚、参考までに、この帆掛岩には、明治後に鳥居があったが、朽ちてしまった。釧路町を隊区とする第27普通科連隊重迫撃砲中隊が協力して、昭和53年此の鳥居を再建した。

⑥ 蝮蛇岩

知床海岸に蝮蛇のような怪岩が海に突きだし、その傍には、人が立てるような岩があるとい

う。弁慶の妹（妹が居た？）を大蛇が妹を飲み込もうとしたので、怒った弁慶が大蛇を踏み殺した。すると岩になったと言う事である。

(<http://www.aurens.or.jp/hp/therausy/d24.html>)

参考までに：十勝平野の一部の畑地に菜の花が咲いているのを何故今頃と不思議に思われた方も居るのではないだろうか。実はあの黄色い菜の花のような花は『キガラシ』というものであって、緑肥にするもののようなようです。菜の花科に属することは間違いないようですが。